火傷の男

おもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
火傷の男

【Ｎコード】
Ｎ９４４０Ｎ

【作者名】
おもち

【あらすじ】
赤井秀一さんについて、わたしの考えをまとめています。
「銃声がおわるまで」ともリンクしてます。

携帯に

「Ｈｅｌｌｏ．」

「Ｈｅｌｌｏ…．Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｍｓ．Ｋｕｄｏ？」

「Ｓｐｅａｋｉｎｇ．　Ａｈ…．Ｗｈｏ，ｓ　ｓｐｅａｋｉｎｇ？」

「Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｈｅａｒ　ｙｏｕｒ　ｖｏｉｃｅ，Ｙｕｋｉｋｏ．」

「えっ・・・シャロン？」

「ひさしぶりね、有希子。その驚きようだと、どうやらあなたの息子にわたしの事聞いたのね。」

「じゃあ・・・シャロン・・・。」

「Ｔｈａｔ　ｒｉｇｈｔ．　今はクリスよ。」

「シャロン、早くそんな仕事から手を引いて！　お願い！」

「もう、無理よ・・・。」

「そんな！」

「あなたの息子やエンジェルをなるべく巻き込まないように気をつけるわ。」

「シャロン・・・本当に大丈夫なの？」

「ええ。それで、お願いがあるの・・・あなたの家の郵便受けをすぐにチェックして。」

「郵便受け？」

「この黒い封筒？」

「中身を見て・・・。」

「こ、これは・・・？」

「赤井秀一の写真とデータ。有希子に頼みがあるの。」

「えっ・・・。」

「この男に変装して、日本・・・米花町あたりをうろついてほしいの。もちろん、有希子の命はわたしが守るわ。」

「この男・・・に？」

「厳密に言うと、この男によく似た男ね。顔にやけどのあと、右利き、にしてほしいの。」

「大丈夫なの？」

「この男はすでに死んでるわ。心配しないで。」

（そんな・・・赤井秀一は・・・生きているのに・・・ついこのあいだ、彼が変装するのを手伝ったばかりなのに！）

あの日

「でてきていいよ！　赤井さん！」

コナンが叫んだ。

「どうも。これからよろしくおねがいします。」

赤井秀一は簡単な変装を解きながら、工藤夫妻の前にあらわれた。

赤井秀一は来葉峠で死んではいない。

こうなることもとっくに予測していた。準備もしっかりしていた。

コナンや博士の協力で他人に化け、生活していたが、そんな生活も限界に近い。

というわけで予定通り工藤邸に居候。そしてあるホテルの一室で工藤夫妻とあっていた。

「・・・事情は聞いていたが・・・すばらしい。」

世界的推理小説家の優作もため息。

「で、どういうこと？　新ちゃん。」

「ああ。母さんに頼んでいただろ？」

「ああ、使いまわせるマスクや体格を変えるためのキット。ばっちりよ。」

有希子は器用に次々と道具を取り出した。

「このマスクは使いまわせるし、長時間使っても大丈夫。着け心地も最高、血もでるようにしてあるわ。この小型変声機はここにセットできて・・・・・・。」

「じゃあ予定通り、わたしは沖矢昴、バーボンとして活躍する。本当はライがダメになった後、すぐにでも潜入しようと変装して入っていたんだ。でもＦＢＩの許可はとってないし・・・もう使うこともないと思ってたけどね。よかったよ・・・。」

「灰原のこと、頼む。」

「ああ。あの子のことは全力で守る。あの子の姉さんの分まで・・・。」

「じゃあ、父さん、母さん。俺たちはここで。後は打ち合わせ通り、頼むぜ。」

「ええ。赤井さんも、困ったことがあったらすぐに連絡してね。」

「工藤さん、ありがとうございます。もうあなた方も立派な協力者、組織にいつ狙われてもおかしくない・・・注意してくださいよ。」

有希子はシャロンからの電話もそっちのけであの日のことを思い出していた。

「有希子？」

「ごめんなさい・・・おどろいちゃって。」

「まさか赤井秀一について知ってるんじゃないでしょうね！？」

「ううん・・・。」

「あやしいわ。なにか知ってるの？」

「な、何も知らないわよ♪」

「赤井秀一は生きている・・・・。」

「えっ！？」

「今も組織を追っている・・・・やっぱり、有希子。あなた協力してたのね。」

「仕方ないでしょ。新ちゃ・・・・あっ。」

「Ｃｏｏｌ　ｇｕｙ　ね。大丈夫。彼らは大丈夫よ・・・・。」

「なんでもないわシャロン！　ねぇ！　なんでもないの！」

「組織は赤井秀一の死をまだすこし疑ってるの。きっともうすぐばれるわ。だから・・・本物がどうしてるかしらないけど、それらしい人物で目をそらせようって・・・・。」

「じゃあなんで・・・・。」

「なぜそっくりじゃダメなのか？　ちょっと頭を働かせれば変装だとわかるように。」

「そうじゃなくて・・・・。」

「お願い、わたしはほかのことがあってできないの・・・。」

「いいわ。それが新ちゃん達のためになるのなら。」

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．本当にありがとう。詳しいことは後日連絡するわ。もちろんこのことは秘密よ。」

「ええ・・・。」

「大丈夫。あなた達の安全は保障するわ。じゃあ切るわね。長電話は怪しまれるから。」

「シャロン・・・。」

「何？」

「Ｎｉｃｅ　ｔａｌｋｉｎｇ　ｗｉｔｈ　ｙｏｕ！　Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ！」

「Ｍｅ　ｔｏｏ．」

銀行強盗のとき

「はぁ・・・。」

有希子はため息をついた。

「ここで・・・いいのよね。」

銀行の中で、有希子はため息をついた。もちろん、心の中で。

すでに隣にいた客は気味悪そうにほかの椅子にいってしまっていた。

（あの人だって、わたしの正体が分かれば喜んで来るだろうに・・・。）

火傷のあとがある男は誰からも話しかけられず、さみしげに座っていた。

シャロンの言葉だと、赤井秀一の姿でうろつくのは危険。でも、有希子はシャロンを信じた。

目の前を金髪美女が通った。

（シャロン？　まさかわたしを守りに？　いえ・・・まさかＦＢＩのジョディ捜査官！）

有希子は、いや火傷の男は無関心を装いながら、座り続けた。

（ここに座っているだけでいいのかしら・・・やっぱり赤井秀一っ

ぽい行動をしたほうが・・・って新ちゃん！）

コナン達が銀行に入ってきた。

「シュウ！　シュウ！」

（はあ・・・。）

銀行強盗が来たはずみに、うっかりジョディの横に座ってしまった有希子。

「シュウ！」

（わたしシュウじゃないの。ごめんなさいネ。）

（新ちゃんやるぅ～！）

事件もいよいよクライマックス。コナンと少年探偵団が大活躍していた。

（いいわよ！　ってなによ！　捕まっちゃったじゃない。どうしましょう・・・。）

コナンは苦戦していた。

シャロンには何もするな、ただ銀行にいろと言われている。

でも、有希子は心を決めていた。

なぜこの話を引き受けたのか、なぜ組織の依頼を受けたのか・・・。

ほかでもない、息子のためであった。

組織とつながればシャロンからなにか情報がくるかもしれない。

赤井秀一のふりをして行動すれば組織をかく乱させることができるかもしれない。

シャロンが本当に助けを必要としているのかもしれない。

結果として、新一や赤井秀一を助けることにつながるかもしれない。

そうでないかもしれない。

だから夫にも隠して日本に来た。

（シャロン、守ってね・・・。）

バーン！

プルルルル・・・

「もしもし。」

「有希子！　何してるの！？　発砲したりして。」

「新ちゃんが捕まってたのよ！　それにシャロン、そっちのほうが赤井秀一みたいでいいんじゃない？」

「バカね。今日は組織に赤井秀一が生きていて組織を追っているって事がばれないようにするためじゃないわ。ＦＢＩの子猫ちゃんやｃｏｏｌ　ｇｕｙ　に赤井秀一が生きているかもって教えるためよ。ちょっと注意深く見れば赤井秀一じゃないって分かるだろうけど。じゃあもう切るわ。Ｎｉｃｅ　ｔａｌｋｉｎｇ　ｗｉｔｈ　ｙｏｕ，Ｙｕｋｉｋｏ．」

「・・・・・Ｍｅ　ｔｏｏ．」

「赤井さん？」

「ああ、坊主。あまり来るなと言っていただろ？」

「自分の家だもん。昴さん。」

「今は江戸川コナンだということをお忘れなく。で、何の用だ？何か用があるんだろ？」

「さすがだね、赤井さん・・・。今日銀行でジョディ先生が赤井さんらしき人を見たらしいよ。まさか赤井さん、銀行になんか行ってないよね。」

「そんなはずないだろ？　ずっとこのマスクをつけているんだ。」

「じゃあ・・・。」

「そいつは・・・。」

「「ベルモット！？」」

「ベルモットくらいしかそんなにきれいに変装できないよ。」

「まあな・・・。なにかひっかかる。こんど調べておくよ。」

「ありがとう。バーボンさん。」

沖矢から赤井へ

「沖矢さん！？」

沖矢昴の携帯が鳴り、おなじみの車に乗った赤井秀一（簡単な変装つき）がそれをとった。

沖矢昴の正体がばれかかっていた。

赤井はいままで沖矢昴＝バーボンとして活動してきた。

火傷の男の正体こそ分からなかったが、たぶんベルモットか誰かの罠だろう、と考えて。

赤井であることを隠すためと、バーボンの秘密主義が原因で、大した情報は得られなかったが、シェリーこと灰原の正体を隠すことができた。また、組織のことを調べることができた。（連絡手段などなど。）

が、キャメルが昴に敏感に赤井秀一を感じてしまった。

問い詰められてしまい、なんとか切り抜けたが、それで疑われてしまった。

「もしもし？　ああ、坊主か。」

「うん、江戸川コナンです。・・・準備できましたよ、赤井さん？」

「了解。ホームズさん？」

「じゃあ・・・。」

「作戦決行！」

立てた作戦はこうだ。

赤井は車を止めて沖矢に変装。いったん街に出てうろついた後、ふたたび山の公園に向かう。（防弾対策をバッチリ。）

そこに沖矢を疑ってジンが送りこんだ組織のメンバーが現れる。（手はずになっているらしい。）

撃たれた後、沖矢の車（工藤家が金を出して用意した中古車。）に逃げ込み（あらかじめ近くにいるようにする。）用意していた爆弾を爆発させる。

とみせかけて窓を割り、草むらに転がり込む。

向こうは爆発および昴は死んだと思う。（はず。）

そこに赤井秀一らしい人物の目撃情報を！（有希子が変装。一瞬ジンの前に現れた後、優作の助けを借りて姿を消す。）

沖矢昴＝赤井秀一の可能性を消す。

で、赤井秀一は赤井秀一に戻る。組織の情報などを持って。

計画はドンドン進み、いよいよ有希子の出番だ。

コナンは阿笠博士の車から様子を見ていた。

（母さん、へますんなよ・・・。）

「なかなかじゃのう・・・。」

たしかに出てきた男は赤井秀一だった。

コナンはその姿を見て、一瞬首をかしげた。

そのとき、コナンは昨日はなかったゴミ箱に気付いた。

（まさか・・・！？）

「父さん、母さん！　逃げろぉ！　爆弾が！」

ドカン！

一瞬のうちに優作が有希子をつかみ、赤井秀一の変装を解かせ、自分の帽子をかぶせながら草むらに転がり込んだ。

そのとき、サイレンが鳴った。

「新一君。少々早くないかのう。あの消防車。」

「ああ。」

（あの変装？　まさか・・・でもそんなはずないか・・・母さんが火傷の男なんて・・・。）

数時間後、赤井からメールが来た。

成功

ただそれだけ。でもいい知らせだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9440n/

火傷の男

2011年10月6日17時24分発行